

主 題：主に喜ばれる歩みのための祈り④

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章12-14節

テーマ：主に喜ばれる歩みを続けていくのに欠かせない要素とは何か？

今朝皆さんと一緒に考えたいことは、神様に感謝するということです。毎回のようになっているかと思いますが、一年を振り返ってみれば、長いようで、あっという間だったのではないかと思います。もちろん、さまざまなことがひとりひとりの歩みのうちにはあったことでしょう。物事が順調に進み、想像もしていなかったものが与えられて喜んだこともあったでしょうし、その一方で予期していなかった困難に直面して、辛さや悲しみを覚えたこともあったことでしょう。目標を達成するうれしさがある一方、責任の大きさ、日々追われる忙しさやプレッシャー等、仕事面においてさまざまなことを覚えさせられたかもしれません。友人との楽しい時間がある一方で、宿題や試験の多さ、進路を選択するに当たって、先が見えない焦りや恐れといった、学校面においてさまざまなことを覚えたかもしれません。コロナを含めたさまざまな病気が世に存在していましたし、思ってもいなかった病を患って、入院や手術、リハビリ等、健康面において不安や弱さを覚えたこともあったかもしれません。夫や父親としてリーダーシップを発揮すること、妻や母親として、夫に仕えて子育てに奮闘すること。そういった家庭面においての喜びや難しさを覚えたこともあったかもしれません。それらに加えて、日々の歩みにおいて、神様を知る喜びを味わう一方、罪との戦いに何度も直面して、自分自身の罪深さを知り、また兄弟姉妹との間に難しさを経験したこともあったかもしれません。言えるのは間違いなく、みなそれぞれに良いときも悪いときも、小さなものから大きなものに至るまでいろいろなことがあった1年だったでしょう。

そんなさまざまなことを経験した一年を振り返って、果たして私たちは神様に感謝するものとして歩んでいたでしょうか？もっと言えば、神様に感謝をささげる者として、日々成長し続けられたと言えるでしょうか？みことばを愛しておられる皆さんは、聖書がこのように語っていることをよくご存じだと思います。Iテサロニケ5：18に「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」とあります。一部のことでありません。自分が感謝できるものだけではありません。すべてのことについて感謝するということが、これこそがほかのだれでもない神様が私たちに求めておられることでした。また、もちろん新約の著者だけが主に感謝することを教えていたのでもありません。例えば詩篇の著者も同じように述べていました。詩篇92：1に「【主】に感謝するのは、良いことです。いと高き方よ。あなたの御名にほめ歌を歌うことは。」と。ですから、私たちにとってどんなときも神様に感謝するということが良いことでした。それぞれの歩みにとって欠かすことができない、私たちの愛する主が望まれている大切なものだったのです。でも私たちがこれらのみことばを読むときに、それはよくわかっているけれども、実際の生活の中ではとても難しく、苦しみや困難の中に置かれれば、自分には感謝することができません、こんな考えが頭をよぎるかもしれません。実際、神様にいつもすべてのことを感謝するということが、難しさを覚えてしまうことがあります。味わっている問題が大きければ大きいほど、経験している出来事が手に負えなければ負えないほど、いつまでも祈りが聞かれずに状況が変わらなければ変わらないほど、感謝しますと口にはしていますが、心の中では神様への感謝が次第に失われてしまうことがあるのです。

では私たちは、神様に感謝をささげる者として、どうすればますます成長することができるのでしょうか？みことばはその答えを、私たちに教え続けてくれています。聖書に登場していた人物たちの姿を思い出してみてください。例えばかつて一日にして自分の持てる財産や家畜、愛する家族さえもすべてを失ったヨブはこう叫んでいました。まさに取られたすぐ後に、ヨブ1：21に「私は裸で母の胎から出

て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。」と
言っています。かつてアビメレクと呼ばれるペリシテ人の王様の前で、恐怖で気が狂ったかのようにふる
まって、いのちから逃げ出したあのダビデも、詩篇34：1に「私はあらゆる時に【主】をほめたた
える。私の口には、いつも、主への賛美がある。」と口にしていました。また、だれよりも数多くの迫害を
味わってキリストのために苦しんだパウロも、シラスと一緒に牢屋に捕らえられたときの様子が使徒1
6：24-25に「:24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。:25 真夜中ご
ろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」とあります。
パウロもヨブやダビデと変わりませんでした。主に向かって賛美をし続けていたのです。

すべてのことについて感謝しなさいとそう口にした張本人は、まさにそのように生きていました。も
ちろん彼らも私たちと何ら変わらない罪人のひとりでした。しかし、彼らは涙を流して、苦しみや痛み
を正直に口にすることはあれども、感謝を失い、不満や失意に支配されてしまうことはありませんで
した。それはたとえどんな状況にあったとしても、ほかのだれでもない愛する主の姿を覚えていたからで
した。いつも変わる事のない神様に目を留めて、この方がなされることに信頼して、喜んで生きてい
こうとしていたのです。兄弟姉妹の皆さん、私たちもこのようにしてきょうを生きていくことができます
。いや、私たちはこの不満にあふれて、キリストにある本当の満足を知らない世にあって、神様に感
謝をささげる者として成長し続けていくという大切な責任を負っているのです。そして、そのために欠
かせないことは、私たちも同じです。神様の姿と働きを正しく覚え続けることです。そのことをパウロ
はコロサイの中でも教えてくれていました。

○主に喜ばれる歩みのために：欠かせない六つの要素

きょうはコロサイ1：12-14を中心に考えていきたいと思います。私たちは数週間にわたって主
に喜ばれる者として成長していくに鍵となる六つの要素を、パウロの祈りのことばの中から学んできま
した。もうすでに一つ目から五つ目までを見てきました。

1. 神のみこころに関する知識に満たされること 9b節
2. 主にかなった歩みをしていくこと 10a節
3. 実を結び続けていくこと 10b節
4. 神様を知り続けていくこと 10c節
5. 神様の力によって強められ続けること 11節
6. 喜びをもって神様に感謝をささげ続けていくこと 12-14節

では、最後に六つ目の要素はどんなものなのでしょう？パウロはコロサイの信仰者たちが具体的にどんな
者として成長し続けていくことを祈っていたのでしょうか。まずはみことばを実際に見てみましょう。い
つものように全体の流れを抑えることも踏まえて、9-14節までお読みします。

コロサイ1：9-14

「:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。ど
うか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされま
すように。:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結
び、神を知る知識を増し加えられますように。:11 また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって
強くされて、忍耐と寛容を尽くし、:12 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与
えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。:13 神は、私たちを暗
やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。:14 この御子のうちにあ
って、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」

さて、主に喜ばれる者として成長していくのに欠かせない六つ目の要素は、喜びを持って神様に感謝
をささげ続けていくことです。12節の後半部分に注目して見てみると、パウロは「父なる神に、喜びを
もって感謝をささげることができますように」と言っていました。パウロははっきりと祈っていたのです。

コロサイの兄弟姉妹たちがますます父なる神様に向かって感謝をささげる者となりますようにと。ここで「感謝をささげる」と訳されている動詞は、先々週見たほかの動詞と同じです。これには継続を表す現在形が使われていました。ということは、「感謝をささげる」というのがたった1回限りの話をしていただけではなくて、喜びをもって感謝をささげ続けることをパウロは言わんとしていました。一度ではありません。都合がいいときだけではありません。途絶えることなく、いつもどんな状況にあつたとしても、神様に感謝し、賛美し続けることこそが主に喜ばれる生き方だったのです。でも皆さんに注目してほしいのは、パウロはここでコロサイの信仰者たちが、父なる神様に単に感謝し続けるようにと祈っていたのではなかったということです。

●父なる神様に感謝をささげるべき三つの理由：

彼はこの箇所を通して、なぜ彼らが父なる神様に感謝をささげ続けるべきなのか、その理由も明白に述べていました。彼は信仰者たちがいつも神様に向かって感謝をささげることのできるはっきりとした根拠をここに記していたのです。もっと言うのであれば、コロサイの兄弟姉妹たちが父なる神様に向かって賛美し続けるべき三つの理由を、この12-14節に挙げていました。そうやってパウロは自分たちとともにいる神様が、いったいどんなお方で、どんな働きを成し遂げたお方なのかを彼らに思い出させようとしていたのです。それが彼らの感謝の根拠でした。もちろんこれは初めにも言っているように、今の私たちにとっても大切なものになります。これから見る三つの理由というのは、私たち自身もどんな時も喜びをもって、神様に感謝をささげるのに十分な理由になります。神様に感謝をささげる者として、ひとりひとりが成長し続けていくのに欠かすことのできない鍵となるのです。では、いったいパウロはどんな理由を挙げていたのでしょうか？それぞれ順番に見てみましょう。

1) 父なる神様が資格を与えてくださったから 12節

まず一つ目の理由が12節に書かれています。特に前半のところに「また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように」と書いてありました。父なる神様に感謝をささげるべき一つ目の理由は、父なる神様が聖徒の相続分にあずかる資格を与えてくださったということです。これは私たちがどんなときも喜んでこの方に向かって賛美をし続けるのに十分な理由になるのです。でもそれは何を意味しているのでしょうか？この部分を正しく理解する上で鍵になるのは、この「資格を……与えてくださった」ということばです。これにはもともと「足りていない何かを十分にする」という意味があります。そして、ここから「何かに力を与える」とか、「何かに資格を与える」といった意味で用いられます。これと同じことばが別の箇所でも用いられています。Ⅱコリント3：5-6に「:5 何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというではありません。私たちの資格は神からのものです。:6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。」と出てきます。ここでパウロは、新しい契約に仕えるキリストのための働きについて触れていたのですけれども、彼が言わんとしていたことは明白でした。それはキリストのためになしている働きはすべて、自分の力や手柄だと考えられるものはいっさいないということです。なぜかというと、キリストに仕える者としてくださり、その資格を与えてくださったのは、ほかのだれでもない神様だったからでした。新しい契約に仕える者となる資格を神様が与えてくださったのです。言い換えればパウロは、自分のうちにはそもそもその資格がいっさい備わっていないということを理解していたということです。すべてが自分から出たものではなくて、恵みによって神様から与えられたものであると彼は知っていました。神様の力がその働きを可能にしているということを正しく知っていました。だからこそ、その働きのうちにあるそれが何であろうと、自分自身のしたことだと考える資格は到底ないとわかっていたのです。

そして、聖徒の相続分にあずかる資格を父なる神様が与えてくださったということは、コロサイの兄弟姉妹にしる、パウロにしる、今を生きている私たちにしる、だれひとりとしてそもそもその資格を持

っていなかったということです。自分の力によって、努力によってその資格を勝ち取ったのではありません。足りていない、値もしない、全くの不十分な者に、父なる神様が恵みによって、その資格を与えてくださったということです。具体的に救われた者のあずかる相続分とはどんなもののかを言うのかと知っているかもしれませんが。でも残念ながらここに具体的なことは書いていませんでした。パウロは、神の子どもとされた者に与えられる永遠のいのちを、主にお会いして与えられる神様からの輝かしい祝福を思い浮かべていたのかもしれませんが。それ以上に、天でイエス様にお会いして、イエス様と永遠をともにすることができるその喜びを思い浮かべていたのかもしれませんが。書いていない以上、私たちにわかりません。でも、それがどんなものであろうと、父なる神様によって私たちはそれらにあずかることのできる資格が、その権利が、その特権が与えられたと言うのです。

I ペテロ 1 : 3-4 にもこんなみことばが記されていました。「:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」と。本来であれば、罪人である私たちに値したものは、ただ神様からのさばきでしかありませんでした。みことばがはっきりと示しているように、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」(I ペテロ 1 : 16) という、そんな完全な神様の基準を前にしたとき、私たちはだれひとりとしてこの基準を満たすことなどできませんでした。すべての人が例外なく、どんな罪をも正しく扱われるこの義なる神様の前に、公正にさばかれて永遠に滅ぼされて当然だったのです。

でもそんな滅びにのみ値する私たちに対して、神様がひとり子であるキリストを与えてくださり、この方の十字架のみわざによって、私たちが神の義としてくださいました。また、それに加えて、本来であれば決して値することのない私たちに対して、聖徒の相続分にあずかる資格さえも、天にたくわえられているその祝福さえも与えてくださったのです。そもそも神の御国に入る資格などいっさいなかった者に対して、今は天にあってその資産が私たちが待っているのだと。私たちが何かをしたからではありません。父なる神様がそのように働いてくださったのです。それが父なる神様がなしてくださった測り知ることでもできない恵みのみわざでした。そしてそのことを私たちが覚えるときに、そんな神様の姿や働きを目の当たりにするときに、この神様に喜んで感謝をささげたいと。こんな不十分で罪深い自分を救ってくださって、神の子どもとして引き継ぐその資格を受けるのに十分な者としてくださった恵み深い方を心からほめたたえたいと。父なる神様が資格を与えてくださったから、私たちはこの方にどんなときも感謝をささげる者として歩んでいこうとするのです。でも、これだけで喜びにあふれて賛美するのに十分過ぎる理由ではないでしょうか？

2) 父なる神様が助け出してくださったから 13節

これで終わりではありませんでした。続けて二つ目の理由を13節に記すのです。13節に「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」とありました。父なる神様に感謝をささげるべき二つ目の理由は、この方が助け出してくださったからです。父なる神様が聖徒の相続分にあずかる資格を与えてくださっただけでなく、暗やみから御子のご支配へと移してくださったことは、私たちがどんなときも喜んで、この方に向かって賛美し続けるのに十分な理由になるのです。

ここで「暗やみの圧制」と訳されていたことばは、「力」や「権威」、「支配」とも訳すことのできることばです。でも、パウロがここで言わんとしていたことは明白でした。かつて私たちはみんな暗やみを支配する力——サタンに従って生きていたということです。間違いなく聖書は、救われる前、すべての罪人が例外なく、深刻な助けを必要とする存在であると描いていました。エペソ2章でもパウロは同じ

ことばを用いて、キリストを知らない者の姿をはっきりと描いていました。エペソ 2 : 1-3 にこうあります。「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と。みことばはキリストを持っていない者はみんな死んでいると言っていました。大きな病気にかかっているのでも、弱り切っているのでもありません。罪と罪過の中にただ死んでいると。生まれながらの私たちは例外なくみんなそんな状態にありました。自分たちを造ってくださった創造主なる神様を愛して、この方に従つて生きていこうとはしません。かわりに忌み嫌われる悪を積み重ね、好き勝手に行い、自分たちが死んでいるともわからずに、正しい道から外れて聖なる神様の前に頑な御怒りを積み上げ続けていたのです。考えや思いも、心やからだのすべてに至るまで罪によって汚れていた私たちは、神様のことなどいっさい考えようとしませんでした。だれもこの方を愛し、この方に従つて生きていこうと望むこともなければ、ただ自分の願うままに、心の望むままに欲に従つて生きていたのです。そこには何の結果もないと思つていることが死んでいる者の特徴でもあります。

また、ただ創造主なる神様に逆らっているだけではなくて、この世の支配者であるサタンに従つて生きていました。生まれながらの私たち人間は、そんな墮落したサタンや罪の奴隷として生きていた者でした。だからこそ、生まれながらに御怒りを受けるべき子らでした。罪をいっさい良しとされない聖い神様にさばかれて当然の存在でしかありませんでした。これがキリストを知る前の私たちの姿だったのです。死んでいた私たちには、この状況を自分の力でどうこうすることはいっさいできませんでした。ただ、永遠のさばきのみ先に待っている、それが揺るがない現実だったのです。私たちのうちに希望などありませんでした。しかし、そんな絶望にあつたときに、ほかのだれでもない神様が私たちを救い出してくださいました。罪の奴隷として生きていたどうすることもできない私たちを神様がそこから助け出してくださいました。

先ほどのエペソのみことばにはもちろん続きがありました。2 : 4-5 に「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」と書いています。ローマ 6 : 20-23 にもこう書いていました。「:20 罪の奴隷であつた時は、あなたがたは義については、自由にふるまつていました。:21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。:22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。:23 罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」と。私たちはただ神様の恵みによって救い出されました。それは何も神様が私たちのうちに何か良いものを見たからではありません。私たちの方からまず神様に対して何かをしたのでも、愛したのでも、何か喜ばれるようなことをしたからでもありません。私たちはただ大きな罪の中に死んでいました。しかし、私たちにはどうすることもできないその罪に、はるかにまさる大きな恵みを神様が与えてくださったことによって、私たちは救われたのです。これが、私たちが持っている希望です。私たちの目にどれほど大きな罪に見えたとしても、あわれみ深い神様の恵みにまさるものは一つとしてありません。どんな罪を犯した人であろうとも、この神様の恵みのうちに、キリストのうちに、罪からの救いを見出すことができます。

だから、もしまだこの神様を拒んでいるのであれば、罪の中に死んでいるのであれば、どうかきょうこのあわれみ豊かな主の前にへりくだつて、自分の救いを求めてください。自分のこれまでの生き方が神様の前に間違つていたと認めて、そこから悔い改めて立ち返り、イエス・キリストを自分の救い主と

して信じ受け入れてください。どうかこの方を自分の主として生きていくことのすばらしさを知ってください。この方にのみまことのいのちがあります。そのいのちをどうか、あなたも手にしてください。

また、もうすでにこの主を信じ従っていこうとされている皆さん、改めてよく考えてください。そもそもサタンや罪の奴隷として生まれながらに歩んでいた私たちに、救いなど到底値するものではありませんでした。罪から来る報酬は死でした。しかし、そんな私たちに神様がまず恵みを注いでくださり、何もできなかった私たちをその支配から解放して、キリストとともに生きる者へと変えてくださったのです。ほかのだれでもない神様が永遠のいのちを、賜物によって与えてくださいました。こんな希望もない、罪の奴隷としての自分を救い出してください、義の奴隷として生きていく者へと変えてくださった。確かに父なる神様が助け出してくださいましたから、私たちは、このあわれみ豊かな方を心からほめたえ続けていきたい、この方にどんなときも感謝をささげる者として歩いていこうとするのです。それだけで私たちが喜びにあふれて賛美するのに十分過ぎる理由だと思いませんか？

3) 父なる神様が罪の赦しを得させてくださったから 14節

でもパウロはこれで終わったのでもありませんでした。彼は最後の三つ目の理由を14節にこう記しています。「この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」と。父なる神様に感謝をささげるべき三つ目の理由は、この方が罪の赦しを得させてくださったからです。父なる神様が聖徒の相続分にあずかる資格を与えてくださっただけではなくて、暗やみから御子のご支配のうちへと救い出してくださいただけではなくて、キリストにあつて贖いを与えてくださったこと、これは私たちがどんなときも喜んで、この方に向かって賛美をし続けるのに十分な理由になるのです。

ここで鍵となる重要なことばがありました。それは「贖い」です。これは私たちの普段の生活の中で余り使わないので、意味がよくわからないかもしれません。でも改めて覚えていてほしいことは、これにはもともと身代金を払うことによって解放するという意味が含まれているということです。実は、この当時、捕らえられている奴隷を解放するために、別の人の方が代わりに代価を支払って取引するといった行為がなされていました。この「贖い」ということばは、そんな背景から来ています。そしてまさにこれこそ父なる神様がキリストにあつてなしてくださいましたすばらしいみわざでもありました。先ほど私たちが見たように、生まれながらに罪の奴隷として生きていた私たちに、だれもその立場から自分自身を解放することなどできませんでした。ほかのだれかが代わりに代価を支払って、買い戻してくれることにしか希望はなかったのです。でも、この奴隷は決してあわれみに値するような存在ではありませんでした。本来であれば、創造主の基準を数え切れないほど破り続けているばかりか、神様ご自身に対して頑なに逆らって生き続けている者だったのです。だれがどう考えたとしても、罪に汚れ、罪の奴隷として生きている私たちなど買い戻すことに値するものではありませんでした。でも、そんな私たちに對して、ほかのだれでもない神様が愛を示してくださいましたのです。ご自身のひとり子であるイエス様をこの地上に送ってください、十字架での尊い犠牲を通して、私たちが自分では決して払うことのできなかった罪の代価を払ってくださいました。

イエス様もご自身が来られた目的をマルコ10：45で明白に言われていました。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と。イエス様が来られた目的はそのとおりでした。イエス様はまさにこのことばどおりに、ご自分のいのちをささげて、贖いの代価を支払ってくださいました。それが十字架の上で成し遂げられた救いのみわざだったのです。そのみわざのゆえに、この方を信じ受け入れる者に罪の赦しが与えられると約束してくださいましたのです。

そして最後皆さんに、少し注目してほしいことがあります。いつも私たちが心に留め続けておけるすばらしい真理が、この12-14節には記されていました。もう一度12-14節に登場している動詞一つ一つに目を向けて見てください。まず12節のところでは「資格を……与えてくださった」と言われ

ていました。つまりパウロはもうすでに起こった過去の出来事として、そのことを記していたのです。父なる神様はもうすでに私たちに資格を与えてくださったのだと。揺るがない真理でした。次に、13節のところでは「救い出して、……移してくださいました」と言われていました。これらも同じです。パウロはここももうすでに起こった過去の出来事として記していました。父なる神様は、もうすでに私たちを暗やみから救い出し、キリストのうちに移してくださいましたと。揺るがぬ真理でした。そして最後に、14節では「罪の赦しを得ています」と言われていました。では果たしてこれはどうでしょう？違いますよね？パウロは「罪の赦しを得ました」とは言わずに、「得ています」と現在の出来事として記していたのです。これは継続を表す現在形でした。私たちはキリストにあって贖い、すなわち罪の赦しを昔も今もこれから先も変わらずに持ち続けているということです。キリストが十字架の上で身代わりとなって成し遂げてくださったその救いをいただいている者の罪は、神様の前にもう完全に洗い流されて、赦されているということです。

これが信仰者が持つことができる揺るがない希望でした。キリスト・イエスにある者が、今罪に定められることは決してないのです。そしてそんな希望を覚えるときに、この神様に喜んで感謝をささげたい、罪の奴隷であった自分のために、代わりに代価を支払って苦しみ死なれ、十字架の犠牲を通して罪の赦しを得させてくださった、そんな偉大な方を心からほめたたえ続けたい、確かに父なる神様が罪の赦しを得させてくださったから、私たちはこの方にどんなときも感謝をささげる者として生き続けていこうとするのです。でもどうでしょう？これだけで喜びにあふれて賛美するのに十分過ぎる理由だと思わないでしょうか？

改めて、私たちの日々の悩みは実際どんなものなのでしょう？先週を振り返っても、今年度を振り返っても、果たして私たちはどんな状況にあらうとも主の姿を覚えて、主のみわざに期待して、感謝を持って生きる、そんな歩みだったのでしょうか？それとも容易に周りの環境や目の前の出来事に左右されて喜びを失ってしまう、そんな歩みでしょうか？思い出し続けてください。一日にして自分の持てる財産も、家畜も、愛する家族さえもすべてを失ったあのヨブも、敵に恐れを抱いて、いのちをねらわれて、苦しんだあのダビデも、また、だれよりも数多くの迫害を味わい、キリストのために苦しみ続けたあのパウロも、彼らはみんな周りの状況ではなく、その状況さえも支配されている変わらない神様に、心を留めて、信頼して生き続けていました。だからこそ、一見すれば喜びを見出すことなどできないような状況にさえ、変わらない神様にあって満足を見出し、感謝する者として生きることができたのです。兄弟姉妹の皆さん、私たちも彼らと同じように生きていくことができます。もっと言えば、私たちはヨブやダビデ以上に、キリストにあって喜びを見出し続けることができます。父なる神様はこんな滅んで当然の私やあなたに資格を与えてくださっただけでなく、助け出してくださいただけではなく、罪の赦しを得させてくださいました。この神様の姿とみわざを忘れないことです。神様がキリストを通してもうすでに成し遂げてくださったその恵みの偉大さをどんなときも心に思いめぐらせ続けることです。私たちはこんなすばらしい神様に向かって感謝をささげないでいい時など一時としてありません。考えれば考えるほど、私たちが神様に感謝をささげる理由は数え切れないほどあります。

きょう私たちは、この後聖餐式も持ちます。感謝報告会も持ちます。でも、これで終わりでもありません。私たちはどんなときも、神様に感謝する者として生き続けていこうとするのです。ともにそのような者になっていきたいという願いを持って、祈り合いながらますます成長していきましょう。